実習３　視覚補助具の中の拡大読書器

国立障害者リハビリテーションセンター自立支援局

福岡視力障害センター支援課　　山田　信也

拡大読書器はもとより光学補助具、非光学補助具の活用に当たっては、当事者自らが視野をはじめとする視覚機能を意識化することがとても大切です。拡大読書器の効果的な使用については、視覚機能の理解がその質や量を決定づけます。

今回の実習では意識化のための訓練方法等については少し触れましたが、取り組みの基本は相手の求めている課題に対して真摯に向き合うことです。

さて、「拡大読書器」の実習では、主に据置型の拡大読書器の持つ優れた機能やその可能性と制約(限界)について言及しました。読字、書字の際のコツ、更に他の非光学補助具との併用方法や、タブレット端末との差異等についても具体的に提示しましたが、既製品で対応できない場合、自ら製作するなど創意工夫することも大切です。また、使用時の姿勢や補助具のセッティング方法も作業課題の効率を左右することも学びました。

補助具を効果的に使用するためには、きちんと屈折矯正されていることも重要です。

今回の実習では、疑似体験を通して読字、書字等の体験し、見え方による工夫の仕方やその効果について学び、病院等に非光学補助具が準備されている場合、どのタイミングで、どのように紹介するのかを体感できたものと思います。